



Title	＜翻訳＞アルムアッラカート試訳（Ⅰ）：イムルウルカイス
Author(s)	池田，修
Citation	関西アラブ・イスラム研究. 2003, 3, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105830
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムアッラカート試訳

池田 修*

(I)：イムルウルカイス

1.

アルムアッラカート (al-mu‘allaqāt) は、ジャーヒリーア時代の優れた詩人7人の代表的なカスィーダ (長詩) 一編ずつを内容とする詩集である。この詩集は「al-qasā'id as-sab' at-ṭiwāl (七編の長詩)」という名で知られているが、このほか「as-sumūt (ネックレス)」とか、「al-mudhahhabāt (黄金詩集)」などという名称でも知られている。

アルムアッラカートというタイトルは、アブー・ザイド・アルクラシー ('Abu Zayd al-qurashī, 9世紀末、または10世紀初の人) による『jamhara 'ash'ār al-'arab (アラブ詩全集)』で初めて用いられているタイトルである。おそらく「首につるされたネックレスのようにすぐれた詩」の意味であろうが、元来、メッカのカバ神殿に、エジプト亜麻布 (qubūṭi) に黄金の文字で書かれ、垂れ幕として披露されたものであるという伝説が生まれたようである。

この詩は、ハンマード・アッラーウィア ('Abū al-Qāsim Ḥammād b. 'Abi Laylā ar-Rāwiya, 695-772) が、アッバース朝初期に編集したものとされている。登場する詩人は、イムルウルカイス ('Imru' al-Qays 6世紀)、タラファ・ブヌ・アルアブド (Ṭarafa b. al-'Abd 6世紀中葉)、ズハイル・ブヌ・アビー・スルマー (Zuhayr b. 'Abi Sulmā 609年没)、ラビード・ブヌ・ラビーア (Labīd b. Rabī'a al-'Āmirī 611年没)、アムル・ブヌ・クルスーム ('Amur b. Kulthūm 6世紀)、アンタラ・アルアブシー ('Antara b. Shaddād 'al-'Absī 6世紀後半)、および、アルハーリス・ブヌ・ヒッリザ ('al-Ḥārith b. Ḥilliza 6世紀) の7名であるが、アルハティーブ・アッティブリーズイー (al-Khatīb at-Tibrizī 1109年没) による『sharḥ al-qasā'id al-'ashr (カスィーダ10編の解説)』においては、以上の7名に、

* 四天王寺国際仏教大学 教授

アルアアシャー・マイムーン (ʿAbū Baṣīr al-Aʿshā Maymūn b. Qays 629年没)、アンナービガ・アズズブヤーニー (an-Nābigḥa adh-Dhubayānī 6世紀) およびウバイド・ブヌ・アルアブラス (ʿUbayd b. al-ʿAbraṣ 554年没) の3人を加え、10名をムアッラカート詩人としている。

2.

イムルウルカイスは、主格ではʿUmruʿu al-Qaysi (ウムルウルカイス) と思われるが、一般に行われている呼称を用いる。「カイスの男」という意味であるが、カイスというのは偶像神名とされ、「カイス神のしもべ」をさすと言われている。本名は Hunduju b. Hujr b. al-Hārith で、彼の祖父のアルハーリスはキンダ王国の王で、イラクのアルヒーラのムンジル王家とは積年の敵対関係にあった。

キンダ王国はヒムヤル系の一族で、もともとハドラマウトのヒムヤルのトッバア家の宗主権のもとに住んでいた。キンダ一族は Hujr. b. ʿAmr の時代に勢力をネジド中央部、アルヤマーマ、ハジャルおよびアルバハレーンの平野部まで伸ばして、独立王国を築いた。イムルウルカイスの祖父アルハーリスは、サーサーン朝ペルシャの皇帝 Qubādh (カワード一世) が、アルヒーラの al-Mundhir b. Māʾ as-Samāʾ に冷淡になったのをみはからって、皇帝に接近した。その結果皇帝はアルムンジルを退位させ、アルハーリスをアルヒーラの王位につけたが、これは長くは続かなかった。すなわち、サーサーン朝皇帝が次のホスロー一世 (アラブ名アヌーシルワーン) (在位531-579) に代わると、新皇帝はアルムンジルに援助を与える方針をとり、ためにアルムンジルは531年アルハーリスを殺害し、キンダ王国の勢力圏をアラビア半島の中央部に押し戻した。

アルハーリスには Hujr, Shurahbīl, Maʿdīkārīb, Salimah の4人の子がいたが、アルハーリス亡き後、フジルはアサド族とガタファーン族を、シュラフビールはバクル族とブヌワイール族を、マアディーカリブはカイス族とキナーナ族を、サルマはタグリブ族とアンナミル族をそれぞれ支配する体制をとった。しかし、サルマとシュラフビールはアルムンジルに殺された。イムルウルカイスの父フジュルはタイイ族の山地の南方からアルヤマーマの南部に達する広い地域に住んでいた。この地域をフジルがいつ頃まで支配していたかはよくわかっていない。イムルウルカイスが伝えている詩の大部分はこの時期の作とみられている。

フジュルは税の徴収をめぐる、アサド族の反乱をまねき、テントで仮眠中殺されてしまった。かくして、父殺害の復讐の義務が王子のイムルウルカイスに課せられることになった。

当時イムルウルカイスは、酒色を題材とした詩作に熱中しており、父のフジュ

ルから王子にふさわしくないとして追放されていた。部族から部族へ、オアシスからオアシスへと放浪生活を送っていたイムルウカイスのもとへ、父が殺害されたとの報告がなされたとき、彼は

ḍayya‘anī ‘abī ṣaghīran
wa ḥammalanī damahu kabīran
la ṣaḥwa l-yawma walā sukra
ghadani l-yawma khamrun
waghadan ‘amrun

父は小さな私を追放したが
大人になると血（の復讐）を私に課した
今日はしらふでおれないが、明日は酔わない
今日は酒だ、明日は（復讐の）用務だ

といったと伝えている。

イムルウカイスのその後の行動は次のように伝えられている。まずバクル族とタグリブ族の協力を得て、アサド族を追い、主だった反乱者を殺した。さらに彼は、ヒムヤルの王 Marthad なる者から騎兵隊を借りるのに成功した。こうして彼はアサド族の反乱を抑えるために、兵を北へ進めた。ところが、今度はアサド族のみならず、キンダ王家を完全に滅ぼそうとするアルムンジル三世の騎兵隊が待ち構えていた。このような状勢の前に、ヒムヤル騎兵隊は次第に立ち去り、最後にはイムルウカイスは一人取り残されることとなった。結局彼は、ビザンツ帝国の緩衝国家ガッサーン朝のアルハーリス王の紹介状を得て、バクル族の詩人アムル・ブヌ・カミーアを伴ってコンスタンチノーブルへおもむき、ユスティニアヌス皇帝に支援を求めた。なお詩人アムルは道中、小アジアで死んだ。

ユスティニアヌス皇帝は彼に援軍をさずけ、帰路に着いた。しかし、皇帝はイムルウカイスが皇帝の姫を誘惑したとの情報を得ると、毒を仕込んだ外衣を親書をつけてイムルウカイスに届けた。イムルウカイスはこの贈り物を受け取って、外衣をまとったが、体中に腫瘍ができ、結局アンカラで540年死んだ。このため彼は、*dhū al-qurūḥ*（腫瘍の男）とか、*al-malik aḍ-ḍillīl*（さまよえる王）と呼ばれるようになった。

以上の言い伝えは、単なるフィクションだといわれてはいるが、たとえそうであっても、当時のビザンツ帝国とサーサーン朝ペルシャと両帝国の緩衝国家のガッサーン朝とラフム朝、および滅び去ったキンダ王国の国際関係の一端を雄弁に物語っているようでもある。

3.

イムルウルカイスの詩の多くは失われており、伝えられているもののうち、もっとも有名なのは、1837年 De Slane が校訂した『*dīwān*』とアルムアッラカート
の長詩である。『*dīwān*』には約20編のカスィーダと若干の断片詩が含まれて
いる。その中の *lāmiya* と *bā'iya* (l と b を脚韻にしたもの) が特に評価が高い。

彼のアルムアッラカはタウル調、82行よりなっている。古来多くの学者が
注釈をつけているが、本試訳は、'az-Zawzanī (1093年没) の『*sharḥ al-mu'allaqāt*
as-sab'』、al-Anbārī (885-90) の『*sharḥ al-qaṣā'id as-sab' aṭ-ṭiwāl al-jāhiliyāt*』 お
よび、at-Tibrizī (またはat-Tabrizī) (1030-1109) の『*sharḥ al-qaṣā'id al-'aṣḥar*』
および、A. J. Arberry の『*The Seven Odes*』(英訳)を参考にした。

イムルウルカイスがこのムアッラカを作詩した動機は第10行以下に述べられ
ている。ダーラト・ジュルジュルで、彼の伯父シャラフビールの娘、すなわち
彼のいところで、恋していたウナイザに出会ったことであつたろう。この出会い
に、それまでの恋の冒険や体験や自然現象など、思い出を一行一行加えて長詩
にしたものであろう。

彼のムアッラカは、かつての恋人と住んでいた住い跡を訪れて思い出に泣く、
ダーラト・ジュルジュルの日をはじめとする数々の情事、放浪生活での体験と
いう三部分よりなる。この体験には、夜オオカミの住む潤谷、馬と狩り、雷、
洪水などがあり、それらが生き生きと描写されている。

わが国では、伴康哉先生が、東京外国語大学・アジア・アフリカ文化研究所、
イスラム文化に関する共同報告No. 3で『イムルウルカイスとその作品』で、彼
のムアッラカのうち、重要な部分24行ほどを訳しておられ、本試訳ではこれら
の部分は大幅にそのまま利用させていただいた。

1. 止まれ、恋人とその住まいを想い出して、さあ泣こう。アツダフルとハウマリと、
2. トウデイフとアルミクラートの間の、砂が寄り合うふちべに、彼女の住まいはまだ跡形を留めているが、それは南風と北風が織り成したものである。
3. 中庭やその先に広がる低地を見れば、コショウの実さながらのレイヨウの糞が散らかっている。
4. 別離の朝、皆が旅立ちの荷物を積む日、テント村のアカシアの根元にたたずみ、コロシントの実を割った者のように涙を流していた。
5. そこで私の恋人は、ラクダを止めて、私に「死ぬほど悲しむな、気丈に耐え忍べ」と言った⁽¹⁾。
6. だが、私を癒してくれるものは、噴き出る涙のみ。いったい、消え行く住い跡に頼れるものがあるのか。
7. それが、お前の情事の常のこと、彼女の前には、アスマルでウナムフワイリスと、またその隣人であるウナムアッラバドとの情事があった。
8. 彼女が立てば身辺から麝香の香りが、東風の息ずかいのように漂って、辺りに丁子の芳ばしさをもたらす。
9. すると思慕の念に駆られて、私の目に熱い涙があふれ、喉もとを濡らし、果ては刀の帯までもぬらした。
10. まことに、何と多くの日々を女人らと、たわむれ、楽しく過ごしたことであろうか。特に、ダーラト・ジュルジュルでの一件があった日。
11. その日、乙女らのために、私のラクダを屠ってやった。殺されたラクダの鞍に積まれた荷物を、乙女らが各自のラクダに分かち合い、積み替えるさまは、まことに不思議な光景であった。
12. 乙女らはラクダの肉や脂身を投げあいつづけたが、それは撚りあわされた白絹の房飾りのようであった。
13. その日私がウナイザのハウダジ（乗りかご）に乗り込むと、彼女は、「何をなさるの、わたしをあるかせるおつもり？」と叫んだ。
14. 二人を乗せたハウダジが傾くと、彼女は「ラクダに擦り傷をつけたわ、さあイムルウルカイス降りて」と求めた。
15. だが私は彼女に、「このまま進めよ、ラクダの手綱を緩めよ、そなたの新鮮な果実から私を遠ざけないでくれ」と言った。
16. そなたのような乙女を、あるひは身重な女性を、あるひはまた、乳飲み子を抱えた婦人を、幾夜訪れたことか。私は彼女にお守りをもつ1歳児を忘れさせ、私に夢中にさせた。

17. 赤子が彼女の背後で泣くとき、彼女は上半身を子のほうにむけたが、私の下の、彼女の下半身はそのまま動かなかった。
18. ある日のこと砂丘の背で、私を拒み違えることはない、と、固く誓った。
19. 「ファーティマよ、まずは穏やかに、少しは手柔らかに、絶交ときめているなら、手心を加えよ。」
20. そなたへの恋心は私を殺すほどのものであり、私の心はそなたが何を言いつけても、それに従うと思いつがっているのか。
21. 私の性格のどこかがそなたの気分を害しているのなら、私の着物（心）をそなたの着物（心）から脱ぎたまえ。それらはひとりでに、ずり落ちるであろう。
22. そなたの両目から流れる二筋の涙は、矢となって、恋に打ちひしがれた私の心をひとえに射すくめる。
23. 女部屋に潜む玉子のような清らかな乙女らのテントに、危険を冒して忍び込む者は、まずいないが、私は忍び込み、悠然と恋に戯れ享楽に打ち興じた。
24. 見張り人や闇に葬ろうと狙っている者たちの目を掠めて、私は女のもとへ忍び込んだ。
25. その時刻には大空にスバル星が現れるが、それはあたかも宝石を散りばめた婦人の飾り帯がきらめいているようだ。
26. 訪ねてみると、彼女はテントの中で衣装を脱ぎ、眠りにそなえ薄地の寝巻きだけを身にまとっていた。
27. 彼女は「アッラーに誓って申しますわ⁽²⁾。あなたをここから追い出す思案が付きませんわ。悪い癖はまだ直らないのですね。」と言った。
28. 私は彼女をテントの外に連れ出した。二人の足跡は彼女が引きずって歩む鞍模様の刺しゅうが施された腰巻の裾が消してくれた。
29. 私たちが部族のテント村の広場を通り過ぎていくと、周りが盛り上がった、砂丘のくぼ地が二人を秘めやかに抱いてくれた。
30. 私が彼女の顔の両側に手を当てて引き寄せると⁽³⁾、彼女の体は私の上に傾いた。彼女の腰は細くくびれ、足首はみずみずしく、ふくよかであった。
31. 腹はたるみなく、引き締まり純白で、腰はくびれて、胸元は磨かれた鏡のように滑らかであった。
32. 彼女は顔をそむけて柔らかな頬を見せて、ワジュラ⁽⁴⁾の野鹿のような瞳を私に向けて身を守ろうとした、
33. 彼女が見せた喉はレイヨウの喉のように形が整い、それを立てると首飾りはしていなかった。

34. 彼女が見せた漆黒の髪は、重たげなナツメヤシの房さながらに、彼女に背中を飾っていた。
35. その巻き毛は束ねられて競り上がり、一部は二筋に、他は乱れて、彼女の額に垂れ下がっていた。
36. 彼女が見せた細くくびれた腰は、ラクダの手綱のようで、足は木陰で水をたっぷり与えられたバピルス⁽⁴⁾の茎のようであった。
37. 朝を迎えても彼女は麝香の粉がまかれた臥所に昼まで眠り、仕事着を着て、腰に帯を締めたりはしない。
38. 彼女が物を揉む指は柔らかく、しなやかで、あたかもザブイの砂虫か、タマリスクで作った爪楊枝をおもわせる。
39. 夕方になると彼女の輝きは暗がりをしてらす。それはあたかも祈りを捧げる修道僧の夜のランプのようだ。
40. 彼女のような婦人と乙女との中間のすらりと、熟れ育った女にこそ分別あるますらおは、熱い目をそそぐべきだ。
41. 彼女はあたかもよごれなき清水で生まれたようで、生まれたての黄みがかったダチョウの白い玉子のようだ。
42. 男たちはすでに恋に溺れなくなっているが、私の心はそなたへの恋からはなれられない。
43. そなたへの恋ゆえに私をいさめ、容赦ない非難を加えた頑固な論敵を幾人、私ははねつけたことか。
44. なんと多くの夜が海の波のように、幾多の不安を伴い、私の上に試練の帳を下ろしたことか。
45. 夜が背を伸ばし、でん部を広げ、胸元が遠のいたとき⁽⁵⁾、私は夜に向かって言った。
46. 「おお長き夜よ朝を明けよ、とはいえ、夜明けがそなたに勝るものではないが。」
47. そなたはなんと玄妙な夜であることよ。まるで星屑は固く撚り合わされた無数の綱で、ヤズブルの山に結び付けられているようだ。
48. あたかもスバル星団はもとの星座に、亜麻の綱で固い岩に吊り下げられているようだ。
49. 私は人々の多くの水袋の紐を、従順で、旅なれた肩に吊るして、運んだものである。
50. ロバの腹のような不毛の涸れ谷を、私は数多く、横切ったが、そこでは狼が子沢山の博徒のようにうなり声をあげていた。

51. 狼が吼えたとき、私はこれに向かって言った、「おまえがまだお金を稼いでいないなら、私と同じこと、われらはお互い貧しいのだよ。」
52. われらはお互い何を也得も取りこぼしてしまう。私とお前の畑を耕す者は、やせ細るだけだ。」⁽⁶⁾
53. 鳥がまだねぐらで眠っている早朝、私は野獣に勝る俊足短毛の大きな馬に乗ってでかける。
54. 襲うと見せて忽ち引き、進むかと思えば同時に退く。そのさまは激流のため、高地から落下する大岩のようである。
55. 栗毛の馬で鞍敷が、雨のため滑らかな固い岩が滑り落ちるように、馬の背からずり落ちる。
56. 痩せても荒馬、いきりたてば、熱を帯びた鼻息はまるで沸き立つ鍋のようである。
57. 踏み荒らされた土地で駿馬が疲労のため、砂埃を立てるときもこの馬は流れ落ちるように走る。
58. 身軽な若者は馬の背から滑り落ち、重量級の強者でも衣服を振り落とされる。
59. それが疾駆するさまは、結び目のある紐を両手で、すばやくよじりながら童が頭上で回すぶんぶんまわし⁽⁷⁾のようである。
60. この馬にはガゼルのようなでん部とガチョウのような脚が備わり、狼のような側対歩と狐のような全力走行ができる⁽⁸⁾。
61. 頑強このうえなく、その後姿を見ると両脚の隙間を真っ直ぐに、地面まで垂れた豊かな尾が塞いでいる。
62. テントのそばに立つときの馬の背は、花嫁の香料を挽く石床か、コロシントをつぶす石台のように引き締まり、なめらかである。
63. 群れを先導する野牛の血が馬の首をそめているが、あたかも、それは白髪の巻き毛を赤く染めたヘンナ⁽⁹⁾の汁のようだ。
64. 野牛の群れが現れた。その中の牝牛らは裾の長い衣服を纏ったダワール⁽¹⁰⁾の乙女達のようだ。
65. 群れが逃げ惑うさまは、高貴な叔父に恵まれた少年の首に吊るされたヤマンの宝石が並んだ数珠⁽¹¹⁾のようだ。
66. 馬は私どもを乗せて群れを先導する野牛に追いついたが、これに続く牛は群れのままで、散っていなかった。
67. 疾駆する馬は直ちに雄牛と牝牛を捕らえたが、一滴の汗もいまだ流していなかった。
68. 料理人たちは肉片を並べて、火で焙ったり、急いで、鍋で煮たりした。

69. 夕方、われらは帰ったが、この馬の見事さに目は幻惑され、背を見、脚を見て驚嘆する。
70. 夜通し鞍を背にし、くつわをつけたまま、放たれることもなく、私の目の届くところに立っている。
71. 友よ、かなたの稲妻が見えるだろう、その輝きをみてくれ、あたかも王冠のような積雲の中で、両手が動いているようだ⁽¹²⁾。
72. 光り輝くさまは、よじられた芯に油を注いで照らす修道僧の灯火のようだ。
73. 私は友とともに腰を下ろして、かなたのダーリジュとアルウザイブの間を走る稲妻を、(雨はどちらから降るのか) みつめた。
74. 押し量ったところ雨が降っているのは、右側はカタン山の上、左側はアシタール山とヤズブル山と見られる。
75. やがて雨雲はクタイファの辺りに豪雨を注ぎ、奔流となってカナフバルの大木を根こそぎ倒した。
76. 激流は飛まつを揚げてアルカナーン山を駆け下り、白い野羊をすべての山腹からおりさせた。
77. タイマーの村では激流はナツメヤシの立ち木一本も残さず、頑丈な石作り以外の砦は⁽¹³⁾すべて流されてしまった。
78. ザビール山は洪水のはじめの頃は、縞模様の外衣を煽った、人々の統領⁽¹⁴⁾のような姿であった。
79. 朝になるとアルムジャイミル山の頂は洪水がもたらした残滓が散乱し、紡錘の頭に渦巻きをあしらったような姿であった。
80. 雨雲はアルガビートの砂漠に、重荷をなげだしたが、まるでヤマンの商人が背負った皮袋をあけ、衣服を展示しているかのようなようであった⁽¹⁵⁾。
81. 朝、涸谷でさえずる雲雀たちは、あたかも薬味の効いた、極上の朝酒を飲まされたようだ。
82. 夕刻洪水に溺れ地の果てまで流された野獣の亡骸は、引き裂かれた野性の玉ねぎのように、汚れていた。

以 上

〔註〕

- (1) タラハのムアッラカ第2行と同じ表現となっている。行末の単語がここでは *tajammālī*, タラハは *tajalladī* としているてんが異なるが意味は“気丈に耐え忍べ”で共通している。
- (2) *yamīna llāhi* “アッラーに誓って”のように、*ʾallāh* (神) という単語が用いられているのが注目される。
- (3) アルアンバーリー (以下Aで表す) は *madatu bi-ghuṣṣay dawmatin* (ドウマの双つの枝に手を伸ばすと) となっている。彼女の頭髪をドウマ樹の枝に、彼女の身体をその果実にたとえたもの。アッザウザニー (以下Zで表す) およびアッティブリーズ (以下Tで表す) は *ḥaṣartu bifawday raʾsihā* と本訳の通りとなっている。尚伴訳では、Zの解説に別の伝承としてあげられているところの、*ʾidhā qultu hātī nawwilīnī* (さあ、私に得させよ、と言え) が訳されている。
- (4) *wajra* はメッカとバスラの間に横たわる荒野
- (5) 夜が長く続くさまを、身体が伸び、夜の始まり (胸元) から時間が長々と経過し、でん部にいたると表現したもの。
- (6) 49～52行はイムルウルカイスの作品ではなく、タアッパタシャッランの作だとする説もある。
- (7) *khudhrūf* Zによると、小石に穴をあけ紐を通して、頭上をぶんぶん回す子供のおもちゃの一種。その石が回るように馬が素早く走るのにたとえている。
- (8) *ʾirkhā* は片側の前足と後ろ足を同時に上げて走行するオオカミ流の走り方。*Taqlib* は四本の足を同時に上げて走るキツネ流の走り方。前者はトロット、後者はギャロップにあたる。
- (9) *hinnā* イボタノキの一種で、手や顔などを赤く染めるのに用いられる。
- (10) *dawār*, *dawwār* 両様の読みができるが、前者をとる。地名または偶像神の名と解される。
- (11) 脚と両ははが黒く、その他が白い牛の群れを数球に比している
- (12) 馬の描写について雷雲の描写に移り、積雲の中の稲妻を、両手が動くのに比している。
- (13) Zは *walā ʾuṭuman* (砦)、AとTは *walā ʾujuman* (屋根のある家) とこととなっている。
- (14) 豪雨に襲われた山の姿を常にジッバをまとっている部族長の座っている姿にたとえたもの。
- (15) 雨が降った後砂漠が緑でおおわれ、色とりどりの花で飾られるさまを、ヤマンの商人が皮袋から色とりどりの衣類を広げ展示するのにたとえている。

بِسْفِطِ اللَّوَى بَيْنَ الدَّخُولِ فَحَوْمَلِ
لِمَا نَسَجْتَهَا مِنْ جَنُوبٍ وَشَمَالٍ
وَقِيَعَانِهَا كَأَنَّهَ حَبٌّ فَلُقُلِ
لَدَى سَمَرَاتِ الْحَيِّ نَاقِفٌ حَنْظَلِ
يَقُولُونَ لَا تَهْلِكِ أَسَى وَتَحْمَلِ
فَهَلْ عِنْدَ رَسْمِ دَارِسٍ مِنْ مُعَوَّلِ
وَجَارَتِهَا أُمُّ الرَّبَابِ بِمَاسِلِ
نَسِيمِ الصَّبَا جَاءَتْ بِرَيَّا الْقَرْنُقِلِ
عَلَى النَّحْرِ حَتَّى بَلَ دَمْعِي مَحْمَلِي
وَلَا سَيِّمَا يَوْمَ بِدَارَةِ جُلْجُلِ
فَيَا عَجَبًا لِرَحْلِهَا الْمُتَحَمِّلِ
وَشَحْمِ كَهْدَابِ الدَّمْقِسِ الْمُفْقَلِ
فَقَالَتْ لَكَ الْوَيْلَاتُ إِنَّكَ مُرْجَلِي
عَقَرْتَ بَعِيرِي يَا أَمْرًا الْقَيْسِ فَانْزِلِ
وَلَا تُبْعِدِينِي مِنْ جَنَّاكِ الْمُعْلِلِ
فَأَلْهَيْتُهَا عَنْ ذِي تَمَائِمِ مُحْوَلِ
بِشَقٍّ وَتَحْتِ شِقْطِهَا لَمْ يُحَوَّلِ
عَلَيَّ وَالَّتِ حَلَقَةٌ لَمْ تَحْلَلِ
وَإِنْ كُنْتُ قَدْ أَرَمَعْتَ صُرْمِي فَأَجْمَلِي
وَأَنْتِ مَهْمَا تَأْمُرِي الْقَلْبَ يَفْعَلِ
فَسَلِّي ثِيَابِي مِنْ ثِيَابِكَ تَنْسَلِ
بِسَهْمِيكَ فِي أَغْشَارِ قَلْبٍ مُقْتَلِ
تَمَتَّعْتُ مِنْ لَهْوٍ بِهَا غَيْرَ مُعْجَلِ
عَلَيَّ حِرَاصًا لَوْ يُسِرُّونَ مَقْتَلِي
تَعَرَّضَ أَنْتَاءِ الْوَشَاحِ الْمُفْصَلِ
لَدَى السَّيْرِ إِلَّا لِبَسَةِ الْمُتَقَصِّلِ
وَمَا إِنْ أَرَى عَنْكَ الْغَوَايَةَ تَنْجَلِ
عَلَيَّ إِثْرَنَا أَذْيَالِ مِرْطَ مُرَحِّلِ
بِنَا بَطْنٌ خَبَتْ ذِي قِفَافٍ عَقَنْقَلِ

١- قِمَا تَبَكِّ مِنْ ذِكْرِي حَبِيبٍ وَمَنْزِلِ
٢- فَتَوَضَّحْ فَالْمِفْرَاةُ لَمْ يَغْفُ رَسْمُهَا
٣- تَرَى بَعَرَ الْأَرَامِ فِي عَرَصَاتِهَا
٤- كَأَنِّي غَدَاةُ الْبَيْنِ يَوْمَ تَحَمَّلُوا
٥- وَفُوقًا بِهَا صَحْبِي عَلَى مَطِيَّتِهِمْ
٦- وَإِنَّ شِفَائِي عَنِيَّةٌ مُهْرَاقَةٌ
٧- كَذَائِبِكَ مِنْ أُمِّ الْحَوِيرِثِ قَبْلُهَا
٨- إِذَا قَامَتَا تَضَرَّعَ الْمِسْكُ مِنْهُمَا
٩- فَقَاضَتْ دُمُوعُ الْعَيْنِ مِثْلَ صَبَابَةٍ
١٠- أَلَا رَبُّ يَوْمٍ لَكَ مِنْهُنَّ صَالِحٌ
١١- وَيَوْمَ عَقَرْتُ لِلْعَذَارَى مَطِيَّتِي
١٢- فَظَلَّ الْعَذَارَى يَرْتَمِينَ بِلَحْمِهَا
١٣- وَيَوْمَ دَخَلْتُ الْخِذْرَ خِذْرٌ غَنِيْرَةٌ
١٤- تَقُولُ وَقَدْ مَالَ الْغَبِيطُ بِنَا مَعًا
١٥- فَقُلْتُ لَهَا سِيرِي وَأَرْجِي زِمَامِهِ
١٦- فَمِثْلِكَ حُبْلَى قَدْ طَرَفْتُ وَمُرْضِعٍ
١٧- إِذَا مَا بَكَى مِنْ خَلْفِهَا انْصَرَفَتْ لَهُ
١٨- وَيَوْمًا عَلَى ظَهْرِ الْكَثِيبِ تَعَدَّرْتُ
١٩- أَفَاطِمَ مَهَلًا بَعْضُ هَذَا التَّدَلُّلِ
٢٠- أَغَرَّكَ مِثِّي أَنَّ حُبَّكَ قَاتِلِي
٢١- وَإِنْ تَكُ قَدْ سَاءَتْكَ مِثِّي خَلِيقَةٌ
٢٢- وَمَا ذَرَفْتُ عَيْنَاكِ إِلَّا لِتَضْرِبِي
٢٣- وَبَيْضَةَ خِذْرِ لَا يُرَامُ خِبَاؤُهَا
٢٤- تَجَاوَزْتُ أَحْرَاسًا إِلَيْهَا وَمَعَشَرًا
٢٥- إِذَا مَا الثُّرَيَّا فِي السَّمَاءِ تَعَرَّضَتْ
٢٦- فَجِئْتُ وَقَدْ نَضْتُ لِنَوْمٍ ثِيَابَهَا
٢٧- فَقَالَتْ يَمِينَ اللَّهُ مَا لَكَ حِيلَةٌ
٢٨- فَقُمْتُ بِهَا أَمْشِي بَجَرٍّ وَرَاءَهَا
٢٩- فَلَمَّا أَجَزْنَا سَاحَةَ الْحَيِّ وَانْتَحَى

عَلَى هَضِيمِ الْكُشْحِ رَبِّا الْمَخْلَلِ
تَرَائِبُهُا مَصْفُولَةٌ كَالسَّجْنَجَلِ
بِنَاطِرَةٍ مِنْ وَحْشٍ وَجَرَةٍ مُظْفَلِ
إِذَا هِيَ نَصْنَتْهُ وَلَا بِمُعْطَلِ
أَثِيبٍ كَقِنُورِ النَّخْلَةِ الْمُسْتَعْنَكِلِ
تَضِلُّ الْعِقَاصُ فِي مَثْنَى وَمُرْسَلِ
وَسَاقِي كَأَنْبُوبِ السَّقْيِ الْمَذْكَلِ
نُؤُومُ الضُّحَى لَمْ تَنْتَطِقْ عَنْ تَفْضُلِ
أَسَارِيعِ طَبْنَى أَوْ مَسَاوِيكُ إِسْجَلِ
مَنْـسَارَةٌ مُنْسَى رَاهِبٍ مُتَبَتِّلِ
إِذَا مَا اسْبَكَرَتْ بَيْنَ دِرْعٍ وَجَحْوَلِ
غَذَاهَا تَمِيرُ الْمَاءِ غَيْرَ مُحَلَّلِ
وَلَيْسَ فَوَادِي عَنْ هَوَاكِ بِمُنْسَلِي
نَصِيحٍ عَلَى تَعْذَالِهِ غَيْرَ مُؤْتَلِي
عَلَى بِأَنْوَاعِ الْهُمُومِ لِبَيْتَلِي
وَأَزْدَفَ أَعْجَارًا وَتَاءً بِكُلْكَلِ
بِضُبْحٍ وَمَا الْإِضْبَاحُ فِيكَ بِأَمْثَلِ
بِكُلِّ مُغَارِ الْفُتْلِ شُدَّتْ بِيَذْبَلِ
بِأَمْرَاسٍ كَثَّانٍ إِلَى صُمِّ جَنْدَلِ
عَلَى كَاهِلٍ مَتَّى ذُلُولِ مُرَحَّلِ
بِهِ الذُّنْبُ يَغْوَى كَالْخُلَيْعِ الْمُعْيَلِ
قَلِيلُ الْغِنَى إِنْ كُنْتَ لَمَّا تَمَوَّلِ
وَمَنْ يَحْزَرْتُ حَزْنِي وَحَزْنُكَ يُهْزَلِ
بِمُنْجَرِدِ قَيْدِ الْأَوَابِدِ هَيْكَلِ
كَحُلْمُودِ صَخْرِ حَطَّةِ السَّيْلِ مِنْ عَلِ
كَمَا زَلَّتِ الصَّفَوَاءُ بِالْمَتَنَزِّلِ
إِذَا جَاشَ فِيهِ حَمِيَّهُ غَلَى مِرْجَلِ
أَثَرْنَ الْعُبَارَ بِالْكَدِيدِ الْمَرْكَلِ
وَبُلُوى بِأَنْوَابِ الْعَنِيفِ الْمُثْقَلِ

٣٠- مَدَدْتُ بِغُضْنِي دَوْمَةً فَتَمَّائِلَتْ
٣١- مُهْفَهَفَةً بِيَضَاءٍ غَيْرِ مُفَاضَةٍ
٣٢- تَصُدُّ وَتُبْدِي عَنْ أَسِيلٍ وَتَتَقَى
٣٣- وَجِيدٍ كَجِيدِ الرِّيمِ لَيْسَ بِفَاحِشٍ
٣٤- وَفَرَعٍ يَزِينُ الْمَتْنَ أَسْوَدَ فَاحِمِ
٣٥- غَدِيرُهُ مُسْتَشْزَرَاتٌ إِلَى الْعُلَى
٣٦- وَكُشْحٍ لَطِيفٍ كَالْجَدِيلِ مُحْضَرِ
٣٧- وَيُضْحِي قَنِيتُ الْمِسْكِ فَوْقَ فِرَاشِهَا
٣٨- وَتَغْطُو بِرُخْصٍ غَيْرِ شَتْنٍ كَأَنَّهُ
٣٩- تُضِيءُ الظَّلَامَ بِالْعِشَاءِ كَأَنَّهُا
٤٠- إِلَى مِثْلِهَا يَزْنُو الْحَلِيمُ صَبَابَةً
٤١- كَبِكْرِ الْمُقَانَاةِ الْبَيَاضِ بِصُفْرَةٍ
٤٢- تَسَلَّتْ عَمَائِدَاتِ الرِّجَالِ عَنِ الصَّبَا
٤٣- أَلَا رَبِّ خَضِيمٍ فِيكَ أَلَوَى رَدَدْتُهُ
٤٤- وَلَيْلٍ كَمَوْجِ الْبَحْرِ أَرْخَى سُدُولَهُ
٤٥- فَقُلْتُ لَهُ لَمَّا تَمَطَّى بِصُلْبِهِ
٤٦- أَلَا أَتَيْهَا اللَّيْلُ الطَّوِيلُ أَلَا انْجَلَى
٤٧- فَيَا لَكَ مِنْ لَيْلٍ كَأَنَّ نَجْمَهُ
٤٨- كَانَ الثُّرَيَّا عَلَّقَتْ فِي مَصَامِيهَا
٤٩- وَقِرْبَةِ أَقْوَامٍ جَعَلَتْ عِصَامَهَا
٥٠- وَوَادٍ كَحَوْفِ الْعَيْرِ قَفَرٍ قَطَعْتُهُ
٥١- فَقُلْتُ لَهُ لَمَّا عَوَى إِنَّ شَأْنَنَا
٥٢- كِلَانَا إِذَا مَا نَالَ شَيْئًا أَفَاتَهُ
٥٣- وَقَدْ أَعْتَدَى وَالطَّيْرُ فِي وَكُنَاتِهَا
٥٤- مِكْرٌ مِفْرٌ مُقْبِلٍ مُذِيرٍ مَعَا
٥٥- كُمَيْتٍ يَزِلُّ اللَّبْدُ عَنْ حَالٍ مَثْنِهِ
٥٦- عَلَى الذَّبْلِ جَيْشٌ كَأَنَّ اهْتِزَامَهُ
٥٧- مِسْحٌ إِذَا مَا السَّاحِحَاتُ عَلَى الْوَتَى
٥٨- يَزِلُّ الْغَلَامُ الْخِفْتُ عَنْ صَهْوَاتِهِ

تَتَابَعُ كَفَيْهِ يَحْنِطُ مُوَصِّلِ
وَلِإِخَاءِ سِرْحَانٍ وَتَقْرِيبُ تَنْقُلِ
بِضَافٍ وَرَيْقِ الْأَرْضِ لَيْسَ بِأَعَزَلِ
مَدَاكَ عَرُوسٍ أَوْ صَلَايَةِ حَنْظَلِ
عَصَاةُ حِتَاءٍ بِشَيْبِ مُرَجَّلِ
عَدَارَى دَوَارٍ فِي مُلَاءٍ مُدْبِلِ
بِحِمْدِ مُعَمٍّ فِي الْعَشِيرَةِ مُحْوَلِ
حَوَاحِرْهَا فِي صَرَّةٍ لَمْ تَزَيَّلِ
دِرَاكَا وَلَمْ يُنْضَخْ بِمَاءٍ فَيُغْسَلِ
صَفِيفَ شَوَاءٍ أَوْ قَدِيرٍ مُعَجَّلِ
مَتَى مَا تَرَقَّ الْعَيْنُ فِيهِ تَسْهَلِ
وَبَاتَ بَعِيْنٍ قَائِمًا غَيْرَ مُرْسَلِ
كَلَمْعِ الْيَدَيْنِ فِي حَيٍّ مُكَلَّلِ
أَمَالِ السَّلِيْطِ بِالذَّبَالِ الْمُفْتَلِ
وَبَيْنَ الْعَذِيبِ بَعْدَ مَا مُتَأَمَّلِ
وَأَيْسَرُهُ عَلَى السَّتَارِ فَيَذْبُلِ
يَكْبُ عَلَى الْأَذْقَانِ دَوَّحِ الْكَنْهَبِلِ
فَأَنْزَلَ مِنْهُ الْعُضْمَ مِنْ كُلِّ مَنْزِلِ
وَلَا أُجْمَأ إِلَّا مَشِيدًا بِجَنْدَلِ
كَبِيرٍ أَنْتَاسٍ فِي بَجَادٍ مُرْمَلِ
مِنَ السَّيْلِ وَالْعُثَّاءِ فَلَكَّةُ مِغْزَلِ
نُزُولِ الْيَمَانِيِّ ذِي الْعِيَابِ الْمُحْمَلِ
صُبْحَنَ سَلَاكًا مِنْ رَحِيقِ مُقْلَقَلِ
بِأَرْجَائِهِ الْقُصْوَى أَنْابِيشُ عُصْلِ

٥٩- دَرِيرٍ كَخْذُرُوفِ الْوَلِيدِ أَمْرَهُ
٦٠- لَهُ إِطْلَا ظَنِّي وَسَاقًا نَعَامَةٍ
٦١- ضَلِيعٍ إِذَا اسْتَدْبَرْتَهُ سَدَّ فَرْجَهُ
٦٢- كَانَ سَرَاتَهُ لَدَى الْبَيْتِ قَائِمًا
٦٣- كَانَ دِمَاءُ الْهَادِيَاتِ يَنْخَرُهُ
٦٤- فَعَنَّ لَنَا سِرْبٌ كَانَ نِعَاجَهُ
٦٥- فَأَذْبَرَنَ كَالْجَزْعِ الْمَفْصَلِ بَيْنَهُ
٦٦- فَأَلْحَقَهُ بِالْهَادِيَاتِ وَدُونَهُ
٦٧- فَعَادَى عِدَاءَ بَيْنِ ثَوْرٍ وَنَعْجَةٍ
٦٨- فَظَلَّ طُهَاءَ اللَّحْمِ مِنْ بَيْنِ مُنْضِجٍ
٦٩- وَرُخْنًا يَكَادُ الظَّرْفُ يَفْضُرُ دُونَهُ
٧٠- فَبَاتَ عَلَيْهِ سَرْجُهُ وَلِحَامُهُ
٧١- أَصَاحَ تَرَى بَرْقًا أُرِيكَ وَمِیْضُهُ
٧٢- يُضِيءُ سَنَاهُ أَوْ مَصَابِيحُ رَاهِبٍ
٧٣- فَعَدْتُ لَهُ وَصْحَتِي بَيْنَ صَارِحٍ
٧٤- عَلَا قَطْنَا بِالشَّيْمِ أَيْمَنُ صَوْبِهِ
٧٥- فَأَضْحَى يَسُخُّ الْمَاءُ حَوْلَ كُتَيْفَةٍ
٧٦- وَمَرَّ عَلَى الْقَنَانِ مِنْ تَقْيَانِهِ
٧٧- وَتَيْمَاءٌ لَمْ يَتْرُكْ بِهَا جِدْعَ نَخْلَةٍ
٧٨- كَانَ ثِيْرًا فِي عَرَانِينَ وَبُلْهِ
٧٩- كَانَ ذُرَى رَأْسِ الْمُحَيْمِرِ غُدُوَّةٍ
٨٠- وَأَلْقَى بِصُخْرَاءِ الْغَيْطِ بَعَاغَهُ
٨١- كَانَ مَكَارِكِي الْجِوَاءِ عُودِيَّةً
٨٢- كَانَ السَّبَاعِ فِيهِ عَرْقَى عَشِيَّةً